

登米市歴史博物館

博物館だより NO.25



目次

1. 企画展開催報告……

(1) 伊達綱村没後 300 年記念「お殿様の教養～仙台藩の武家文化～」 P.2

(2) 「平成展～出来事で振り返る登米市の歩み～」 P.3

(3) 亘理宗根没後 350 年記念「伊達政宗のこどもたち」 P.4

(4) ミニ企画展「むかしばなしの古い道具」 P.5

2. 講座について…… 春講座 P.6～7

秋講座 P.8

3. 特集 古文書整理ボランティア…… P.9～10

4. 学芸員の研究ノート…… 「『来翰集』所収のニコライ・ネフスキー書簡」 P.11～22

1. 企画展開催報告

(1) 伊達綱村没後 300 年記念「お殿様の教養～仙台藩の武家文化～」 (担当：高橋)

【開催期間：平成 31 年 3 月 16 日 (土) ～令和元年 5 月 19 日 (日)】

[全入館者数：1,670 名]

仙台藩 4 代藩主伊達綱村の没後 300 年にあたり開催した企画展でした。綱村は登米地方も関わった寛文事件（伊達騒動）で有名ですが、茶の湯や修史編さん事業など教養の面でも注目されます。また、領地巡検で登米地方を訪れ、異母弟の村直が登米伊達家の養子となるなど登米地方と係わりの深い人物でもあります。

このようなことから、綱村に代表されるような「お殿様の教養」に関連する資料を紹介しました。展示構成は和歌や連歌、漢詩、香、能楽、茶の湯など幅広い教養を身につけた伊達政宗から始まり、書画や刀剣、漆器などで優れた作品を残している仙台藩 3 代藩主綱宗へと展開しました。4 代藩主綱村はもちろんのこと、5 代藩主吉村においては能楽に造詣が深く、和歌を好んで『隣松集』、『続隣松集』などの家集や書画を残しています。

会期中は 2 度の展示解説と仙台大学客員教授の伊達宗弘氏を講師に招き、「仙台藩の藩主と館主の教養～引き継がれた豊かな感性～」と題した歴史講座を開催し、より多くの来館者の皆さんに、政治家としてだけではなく文化人としても活動したお殿様の新たな一面を知ってもらう好機となりました。



展示解説の様子



「武蔵野図」 伊達安芸宗重筆

(2) 「平成展～出来事で振り返る登米市の歩み～」

(担当：宇藤)

【開催期間：令和元年7月13日（土）～令和元年8月25日（日）】

[全入館者数：1,168名]

平成31年4月31日をもって、「平成」の時代に幕が下りました。約30年間続いた平成時代のなかで、政治・経済・環境・文化・流行など様々な分野で変化が生じ、登米市にとっても平成時代は大きな意味合いを持ちました。「平成の大合併」が盛んだった当時、登米郡8町と本吉郡津山町の9町が合併した「登米市」も誕生して間もなく市制15周年を迎えようとする節目を目前に、改元と重なるこの機会に、全国的なニュースを取り上げるとともに登米市で起きたいろいろな出来事を振り返り、新たな時代「令和」の幕開けを改めて考えていく展示を行いました。

具体的な展示概要としては、展示室内は年表形式で構成しました。平成時代の全国的な流れのなかで、登米地域ではどのような出来事があったのかを見比べることができるように、年表ならびに展示資料を配置しました。平成の前半では各町に焦点を当て、平成の半ばでは合併に関する動きを取り上げました。そして、後半では決して忘れることのできない東日本大震災の時の市内の様子を紹介しました。

平成時代を知り、今を生きる私たちの軌跡を来館者一人ひとりとともに語り、迎えることのできた企画展となりました。



展示室内の様子



市内の東日本大震災による建物被害

(3) 「亙理宗根没後 350 年記念 伊達政宗のこどもたち」

(担当：高橋)

【開催期間：《前期》令和元年 9 月 21 日（土）～令和元年 10 月 20 日（日）

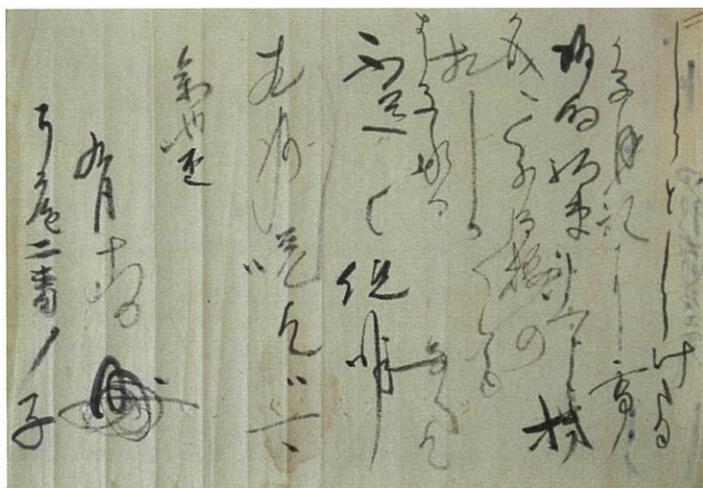
《後期》令和元年 10 月 22 日～令和元年 11 月 17 日（日）】

[全入館者数：1,425 名]

令和元年（2019）は佐沼亙理家初代亙理宗根の没後 350 年となる節目の年でした。当館ではこれを記念する企画展を開催し、佐沼亙理家文書研究により初公開となった古文書が各メディアに大きく取り上げられました。

系図上の宗根は、伊達政宗の重臣・茂庭綱元と豊臣秀吉の寵姫・種（香の前）の子供とされてきましたが、実は政宗の子供であるとも伝承されてきました。そのようななか、今回の展示の中心となった伊達政宗書状（亙理右近太輔宗根宛）により、政宗と宗根の親子関係を証明する重要な資料となることが明らかとなりました。

本資料で特に注目される部分は、宛所の「了庵二番ノ子」と追而書の和歌でした。「了庵二番ノ子」は種の二番目の子供の意味とみられ、追而書に記される和歌は、『和漢朗詠集』下巻・白糸所収の和歌の発句部分を一部改変したものです。監修をいただいた元仙台市博物館長・佐藤憲一氏は、発句は「了庵二番ノ子」にかかり、「本当は自分の子供であるのに知らないふりをして「了庵二番ノ子」と書くのは、白々しい（興覚めだ）なあ」という意味に読み取れるとの見解が示されました。新たな発見を契機として、地域の歴史に興味を持つ方々が増えたことはとても嬉しい出来事でした。



伊達政宗書状（亙理右近太輔宗根宛）



佐藤憲一氏の講演会の様子

(4) ミニ企画展「むかしばなしの古い道具」

(担当：宇藤)

【開催期間：令和2年1月15日（土）～令和2年2月9日（日）】

[全入館者数：668名]

毎年当館では、小学校学習指導要綱及び教科書『小学3・4上』を基にした学校教育の一環として、昔の暮らしや時代とともに変遷していく民具などを、校外学習を通して見聞きし、直に触れて、様々なことを感じ取ってもらい、学習に役立てていただいています。今年は、市内16校の小学3年生が校外学習に来館しました。小グループに分かれての学芸員の解説や博物館ボランティアが昔のくらしぶりを、実体験を聴き、再現する姿は毎年ご好評をいただいています。

本年度は、一寸法師や浦島太郎などの昔話に出てくる道具を絵本などの一コマとともに紹介しました。児童の好奇心を刺激し、博物館ならではの実物資料との対峙による、「見学」から「体感」へと記憶に残る展示を目指しました。

見学後にご好意で贈ってくれる感想文やお手紙には館員一同励まされとともに、博物館事業や展示方法に活かしています。すべての感想文は、児童の成長と学習の記録の意味を込めて館内に展示し、その心のこもった言葉の数々は、フロアに華を添えてくれています。



展示室内の様子



校外学習の様子

2. 講座について

(1) 春講座 [全参加者数：68名]

毎年春の大型連休の時期に合わせて開催している春の講座。今年も地域の歴史や文化を学べる体験型の講座を行いました。

① 春を感じる＊お茶会＊ 【開催日時：令和元年5月3日（金・祝） 10：00～14：00】

博物館ボランティア及び地域住民と協力して、旧亙理邸を活用した裏千家のお茶会を開催しました。



② 歴史講座「伊達綱村と修史編さん事業～お殿様、歴史書をつくる～」

【開催日時：令和元年5月4日（土・祝） 13：30～15：00】

登米市に関連した歴史について学芸員が研究成果を講演する第3弾として、開催中の企画展「伊達綱村没後300年記念「お殿様教養～仙台藩の武家文化～」の予備知識となる講座を講義形式で行いました。



③ こどもの日記念「こどもの日記念「こいのぼりのカード立て」を作ろう」

【開催日時：令和元年5月5日（日・祝） 13：30～15：30】

「こどもの日」にあわせて、メッセージカード用の「こいのぼりのカード立て」を制作する親子向けの体験講座を開催しました。



④ 「史跡を巡ろう～佐沼てくてく歩き～」

【開催日時：令和元年5月6日（日） 13：30～15：00】

新緑に輝く史跡を、博物館～佐沼城本丸～御前巻～西館～旧亘理邸～御陣場山～博物館のコースを学芸員の解説を聴きながら巡り歩きました。



(2) 秋講座 [全参加者数：28名]

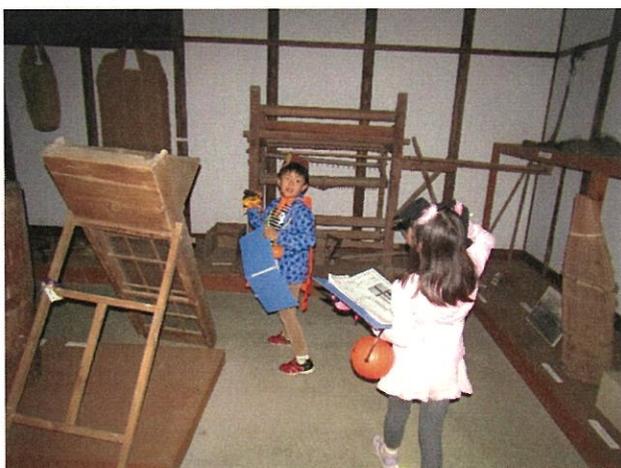
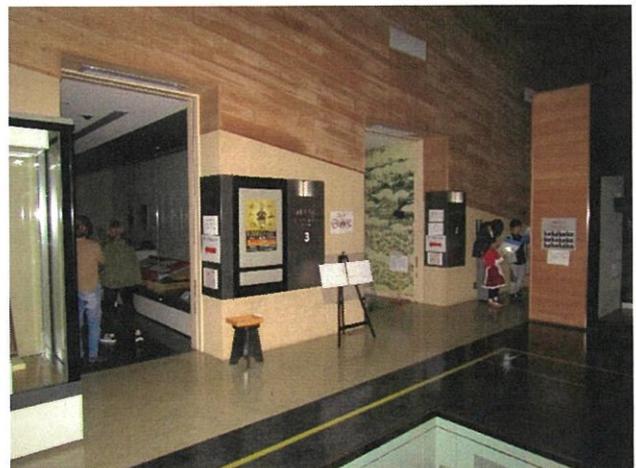
ハロウィンの時期に合わせて、子供たちが興味を持ちそうで、かつ地域ではまだ珍しいハロウィンイベントを楽しむ講座を開催しました。ナイトミュージアムにすることによって、仕事や家事が一段落した家族と普段なかなか体験できない博物館活動をより広く知ってもらう機会となりました。

《講座名》

「ハロウィン de ナイトミュージアム～謎解きでお菓子を手に入れよう～」

《概要》

参加者が思い思いの仮装をし、ハロウィンを楽しみながら夜の博物館で謎解きに取り組んでいました。博物館やその敷地内、周辺史跡などに散りばめられた9つの謎に挑戦し、すべて解いた参加者にはハロウィンのお菓子をプレゼントしました。謎が一つ解けるたびに老若男女問わず喜びの声が上がり、お菓子をゲットした子供たちは達成感にあふれていました。



3. 特集 古文書整理ボランティア

約8年続けてきた当館の幹となる事業「古文書整理ボランティア」。今年度でその活動にも幕が下りました。

1ヶ月に数回の頻度で解説会を設け、当館に収蔵されている数々の古文書を解説し、整理するサポートを行っていました。会員は延べ50名。経験豊富な講師2名のもと、定期的な学習会と年1回の移動研修会によって、近世文書の様式や変遷といった知識だけでなく、地方史や文化史に対する興味・関心をもって活動していました。

この活動のなかで解説した古文書は263点に達しました。最初は古文書の知識がなく、辞書の引き方も分からなかった会員がほとんどでしたが、解説を重ねていくうちに古文書の魅力にどんどん引き込まれていくようでした。

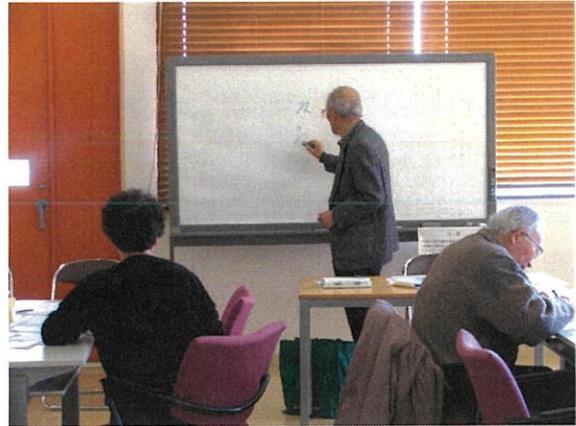
古文書整理ボランティア活動の様子



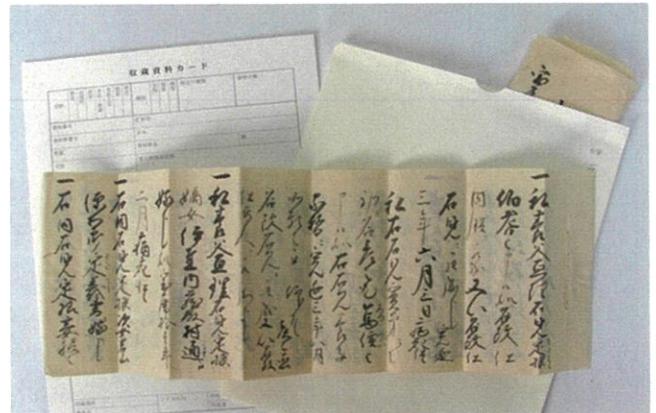
移動研修会の様子



お世話になった講師の方々



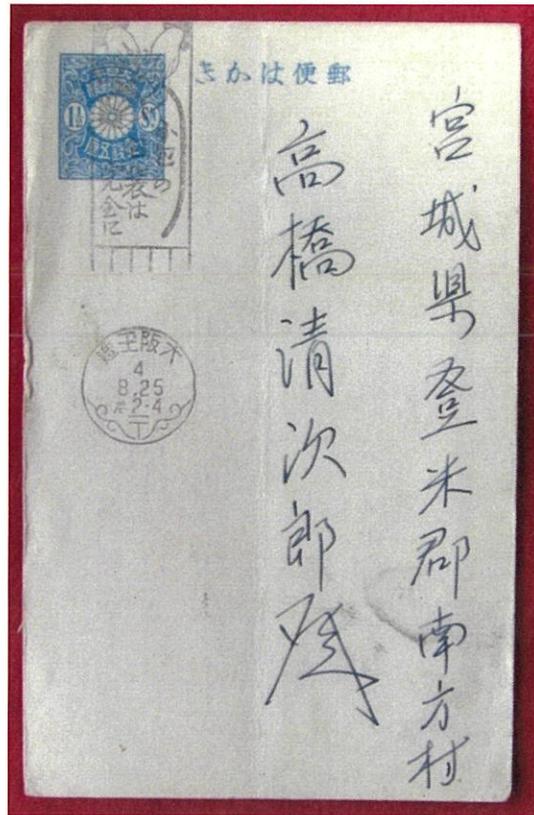
あらゆる内容の古文書を解説



会員同士の交流



◎高橋清治郎宛ハガキ写真

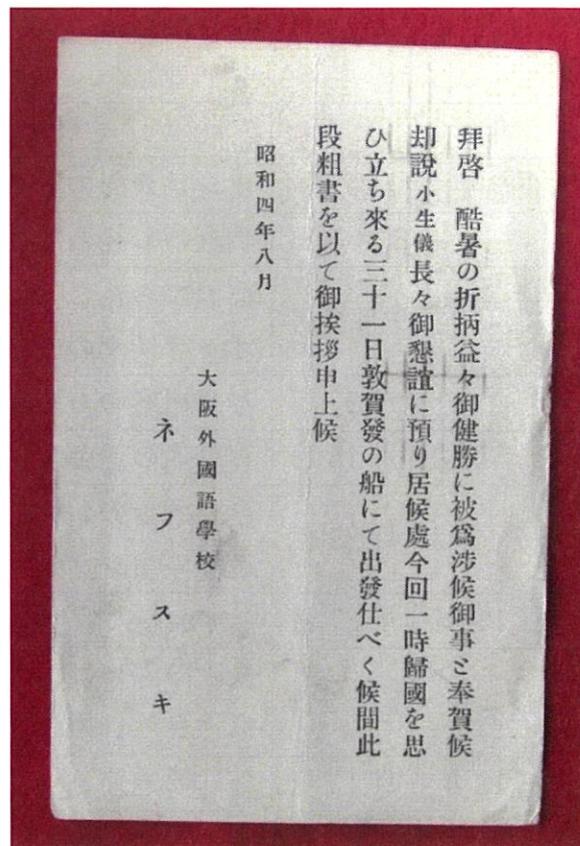


宮城県登米郡南方村
高橋清次郎

郵便はかま

大阪王寺
4
8.25
2-4

郵便はかま



拜啓 酷暑の折柄益々御健勝に被爲涉候御事と奉賀候
却説小生儀長々御懇誼に預り居候處今回一時歸國を思
ひ立ち来る三十一日敦賀發の船にて出發仕べく候間此
段粗書を以て御挨拶申上候

昭和四年八月

大阪外国語學校
ネ
フ
ス
キ

史料番号(10)

宮城県登米郡南方村

高橋清次郎殿

拜啓 酷暑の折柄益々御健勝に被為涉候御事と奉賀候。

却説、小生儀長々御懇誼に預り居候処、今回一時帰国を思ひ立ち来る三十一日敦賀発の船にて出発仕べく候間、此段、粗書を以て御挨拶申上候。

昭和四年八月

大阪外国語学校

ネフスキ

	年 次	内 容	『月と不死』
1	大正9年2月22日	オシラサマの調査依頼。	○
2	3月5日	調査のお礼と追加調査の依頼。	○
3	9月9日	宿泊のお礼と『物類称呼』の贈呈。 オシラサマの仮説(山獺の神)。写真撮影を依頼。	
4	9月27日	写真撮影の方法を指示。	
5	10月16日	写真代の送金。	
6	10月25日	写真到着のお礼と写真代の不足分を送金。 遊佐のオシラサマの追加調査と撮影を依頼。	○
7	大正11年3月27日	4月から大阪外国語学校へ転出報告。	
8	5月4日	来阪の際には宿泊して欲しいこと。 宮古島旅行のこと。	
9	大正12年5月11日	転居の連絡。	

『来翰集』所収書簡一覧

遊佐のオシラサマの御衣裳は絹片ですか、又は布片ですかとの事を知らせて下さいまし。幅広い白布を蔽ふと云ふ事は、例外だと思ひますから、絹片斗り着せてあるオシラサマの写真も欲しいから、お序てが御座いましたら typical の奴を一枚斗り取らして下さいませんか。お願い致します。

末筆ながら先生を始めとして御家族の幸福を祈つて居ります。先つは右御礼まで。 匆々

大正九年十月廿五日

史料番号(7)

御無沙汰致しました。その後は別にお変わりも御座いませんか。お伺ひ申し上げます。

却説、来る四月から小生が大阪外国語学校（大阪市東区上本町八丁目）へ転任になりました。二十三日に小樽をたつて東京へ来て居ります。一週間後は大阪へ参ります。此後も相変わらず御交際を願ひます。西の方にお出になる節ハ、是非小生の所へもお寄り下さいまし。

先は右御通知のみ。御家内の方々にもよろしく。さよなら。

東京市神田区連雀町初谷旅館

三月廿七日

ネフスキイ拜

高橋清治郎様

史料番号(8)

其後は如何お暮しで御座いますか。皆様には御変わりも御座いませんか。

お葉書に依りますと東京へお出になつてそれから、大阪へも御光来あるかもしれませんとの由、うれしく拝見致しました。

当地へお出になる折は、何卒御遠慮なく小生のつまらない家を御宿にして下さいまし。是非お宿待ちして居ります。（但し七月の末になやりますと、事によると琉球の宮古島へ旅行したいと思ひますから、御出の節は御葉書でもお知らせ下さい。）

先は右御通知のみ。 さよなら。

（大正十一年）
五月 四日大坂市外天王寺村字天王寺六一六八

高橋清次郎様

ネフスキ生

史料番号(9)

御無沙汰いたしてみました。その後、御変わりも御変わりも御座いませんですか。私は無事で御座います。そして、今度表記へ転宅いたしましたから一寸御通知申上ります。先ハ取急ぎ御知らせまで。 早々

大阪府下中河内郡枚岡南村

瓢箪山八十四

大正十二年五月十一日

ネフスキ

高橋清治郎様

扱て、今朝御手紙を有りがたく拝読致し早速に御返事申上げます。オカミンの写真に就ては、道具等は御考への通り適当に陳列して一枚に撮る方が宜しからうかと思ひます。(是はカビネ版)オシラサマは別にもう一枚(小版)に撮して頂きたい。オカミンの祈祷姿(オカミンの所へ御供致しました時は、御祈祷の折に必ずオシラを用ゆると聞きましたから其姿がほしいのです。若し、御祈祷の時は弓をも使ふとすれば、猶々、結構で御座いますが、使はぬなら無理に使はせないで下さい。)をカビネ版にして下されば結構と思ひます。出来上つた写真は、ボール紙には貼り附けない様に願ひます。

- | | | | |
|---------|------|----|-------|
| 一、道具揃へ | カビネ版 | 一枚 | 貳円五拾銭 |
| 一、祈祷姿 | 同 | 一枚 | 貳円五拾銭 |
| 一、オシラサマ | 小版 | 一枚 | 壹円 |

合計

金五円也
六ノ誤

右の金格は、明日又は明後日送り送つて上げますから、誠に御迷惑で御座いますが、写真師に頼んで下さいまし。願ひ致します。先は右御願ひまで申上げます。

史料番号(5)

ネフスキイ

敬具

高橋清次郎様

侍史

其後は御無沙汰致しました。別にお変りはありませんか。一寸お伺ひ申上げます。

扱、お約束した金五円はこんなにおそくなつて相済みません。昨日は確に送つて上げました(小為替証書は封内にあり)から何卒お受取下されまし。

先は右当用のミ申上げます。

大正九年十月十六日

史料番号(6)

ネフスキイ

敬具

高橋清次郎様

侍史

其後は御無沙汰致し誠に申訳が御座いませぬ。当地は昨日より急に寒くなり昨朝は少し雪が降りましたそうですが、御地は如何で御座いませうか。やはり冬が近くなつたでせうとてお察し申上げます。

却説、先日は御遣し下さつた写真は、正に受取り難有拜見致しました。思つたより非常に好く取れましたから、厚く御礼を申上げます。先月は金五円也を送つて上げましたが、今日も亦残つた壹円と郵便代五拾銭(金壹円五拾銭也)を送つて上げますから、何卒お受取下下さいまし。おそくなつて相済みません。

史料番号(3)

拜啓 在村中は御厄介になり且又色々御高説を承り厚く御礼申し上げます。

その後は如何お暮しで御座いますか。一寸お伺ひ致します。小生はあれから遠野へ行つて、伊能嘉矩先生や佐々木君に御迷惑を暫く掛けて弘前の方へ足を向けましたが、もう帰りたくなつたために青森県を余り歩行かないで、一昨日に漸く当地に帰つて参りました。他事ながら御安心下さい。

先日は、御約束した物類称呼を送つて上げますから何卒お受取り下さいまし。但し此の本は、前にも断はつた通り巻之二(動物部)が足りませんから何卒あしからず願ひ致します。又近々中に当地のお土産を送つて上げます。粗末なものですが一ツ味はつて下さい。

却説、御承知の通り岩手県の山奥にてはオシラサマが山猟に關係のある神と云はれてるから御地にも似寄つた話は御座いません。小生の考では日本の巫女も猟に關係あると信じますが、まだ証拠ハ余りないので其の愚見を一種の仮定説として置きたい。御地のオカミサンや地方々々の巫女が神降オカしする時は弓を用ひたり猛獸の牙、角、爪等を附けた珠数を擦りたりするのは一つの証拠だと思ひます。錦地のオカミサンに聞けば用ふる理由を照して呉れるかも知れません。新しい材料も拾へるかも知れません。

其からもう一つのお願ひですが、御地のオシラサマやオカミ

ンの使ふ道具(弓、弦を鳴らす撥、横守等)の写真が是非ほしいから佐沼町の写真師に頼んで撮影して下さいませんか。(序にオカミの御祈禱する姿も入要です。)道具は皆別々に写して下さい。種板までも写真師から買つて下さい。お金はどの位入要だか分らないが御勘定の上、早速に返して下さい。

末筆ながら先生を始めとして御家族の御健康を祈つて居ります。皆様にもよろしく。

先は御礼旁願ひまで申し上げます。 さよなら。

北海道小樽区緑町二ノ二八

大正九年九月九日 ねふすき

宮城県登米郡南方村大字東郷新田字大村 拜

高橋清治郎殿

侍史

史料番号(4)

ネフスキイ

大正九年九月廿七日 敬具

高橋清治郎殿

侍者

拜啓 其後は御無音に打ち過ぎ失礼致しました。当地はもう余程寒くなりましたが、此頃漸々晴天になつてゐる為め、却つて清々して気持ちも宜しう御座います。御地も大分お涼しいでせうと存じます。

史料番号(1)

北海道小樽区高等商業学校教師

ネフスキイ

敬具

高橋清治郎殿

侍史

拜啓 余寒酷しく候処、益々御多祥の段奉賀候。

却説、突然の御尋失礼千万に候へ共、此頃、柳田國男先生にすゝめられ、東北特有なる「オシラ神」信仰に關し、少々研究を試み御助力を仰ぎ度候。

先年愚宅に居候女中（オカミサン登米郡佐沼町の生れ）の話に依り候へば、御地にも右の神有之巫女使用の神にて候由、聞きしと覚え居り候。この神に關する伝説（言ひ伝へ）、迷信、神体の様等御存じ候事を御暇の節、御教示被下度願上候。

前以て厚く御礼を申上候。

乍末筆御健康を祈居候也。

先は右不取敢御願まで。 草々

大正九年二月廿二日夜

二伸、外人の候文は御分りに候哉。

史料番号(2)

ネフスキイ

敬具

高橋清次郎殿

侍史

先日は御親切なお葉書を難有く拝見致しまして、ヒナ厚く御礼を申し上げます。

扱、「オシラ様」の事を御承知の如く土地に依つてオシラー・ママ、オシナサマ、オクナイサマ、オコナヒサマ、オシラ仏、イタカ仏、オシメサマ、白山権現等の名前で言ふのです。右の神々は、勿論、同一神で巫女と深い関係の神だと存じて居ります。巫女なんかには鬼神道を通ずる力を与える神様ではないかしらと独断したいのです。又岩手県などには右の神を旧家が○脱字あるべし有る由之はどんな関係でせうか。更に又岩手、青森県ではオシラのお祭りの事をアソビと申すからお雛様にも何かの関係があり相に思はれる如何。（三月の節句をオヒナアソビと云ふのを書物に見た事がある様に思はれる。）

仰せの如く三月下旬まで材料を少しでもお拾ひ下さいまし。たのしくお待ち申して居ります。

時節柄お体をお大切に。 さよなら。

三月五日

生涯』(河出書房新社)

小林文夫 一九七六 「鳥畑隆治をめぐる人々」国男・喜善・ネ

フスキイ」(『東北民俗』第一〇篇)

高橋紘 二〇一八 「柳田国男と高橋清治郎」『来翰集』と未

刊『登米郡年代記』(『登米市歴史博物

館 博物館だより』二十四号)

高橋清治郎 一九九八 『南方村誌』(『南方村誌』を復刻する

会 初出 一九一五)

高木誠一 二〇一四 「民俗書簡集・ネフスキイ書簡」(『復

刻 東北民俗研究』東北文化史料叢書

第七集 初出：一九五〇)

三崎一夫 一九九七 「宮城県の民俗学二人の先学―高橋清治

郎・布施千造」(『東北民俗』第三十一

輯)

柳田国男 一九九九 『大白神考』(『柳田国男全集』十九 筑

摩書房(初出 一九五一)

山下久男 二〇〇〇 「佐々木喜善と民俗学者」(石井正己編『雪

高き閉伊の遠野の物語せよ』 遠野市立

博物館)

吉川壽洋 二〇〇二 「ニコライ・ネフスキイの南方熊楠宛書簡」

(『熊楠研究』四)

若松博恵 二〇〇二 「大阪在任期におけるニコライ・ネフスキ

イの一側面―書簡類からみた居住地と交

友」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』
三号)

【凡例】

- 1 原則として常用字体とした。ただし、人名のみ史料上の表記のままとした。
- 2 変体仮名は、平仮名に直し、翻刻者が注記した場合は、「」で示した。
- 3 紙幅の都合により本文部分の改行を改め、句読点は翻刻者が適宜付した。
- 4 清治郎が読み取れず空欄とした箇所、二重線で訂正した箇所はそのままとした。
- 5 便宜的に書簡ごとに史料番号を付した。

十二年(一九二二)十二月には枚岡南村の「客坊」に居住していたことが明らかになっている(若松 二〇〇二)。本書簡の「瓢箪山八十四」が先行する住所とすれば、五月から十二月以前までの居住地ということになる。ここでは紹介に留め、後考を期すこととしたい。

史料番号⁽¹⁰⁾

本書簡は『来翰集』に未収録の葉書である。表面は直筆で、裏面が印刷となっている。消印を確認することができ、「大阪玉造」^[4]、^[8.25]、^[11.2-4]と読み取ることができる。ネフスキーは昭和四年(一九二九)九月初旬に敦賀から航路でソ連へ帰国している。それに際して挨拶状を送付したようで、本状と同様のものが高木誠一などに届いている(加藤 二〇一一、高木 二〇一四)。ネフスキーは帰国に際して、挨拶状を準備して敦賀に向かう前に投函したのであろう。

おわりに

ネフスキーと清治郎の交流は大正九年(一九二〇)から昭和四年(一九二九)までの続き、特に大正九年のオシラサマ・オカミサンに関する応答が中心となっている。一連の書簡は、ネフスキーのオシラサマ研究に関する新出史料であり、外国人研究者と郷土史家の交流を跡付ける重要史料といえる。今後は「東北地方民間伝承ノート断片」、柳田宛の大正九年九月二十一日付書簡と合わせて清治郎、登米地方との関わりを説明することが求められよう。今後の課題としたい。

注釈

- (1) 佐沼町の事例を報告したものに「陸前佐沼川の御前様」(四巻四号 一九一六)がある。
- (2) 例えば、大正九年二月二十二日付青柳慎次郎宛書簡に「郷土研究」四ノ六三八頁に依り候へば、とある(岡 一九七一)。

- (3) 大正九年三月二十三日付佐々木喜善宛書簡(山下 二〇〇〇)、大正十年三月十三日付南方熊楠宛書簡(吉川 二〇〇二)。

- (4) 小林文夫氏が紹介した鳥畑隆治宛書簡(大正九年八月五日付)は「東京市神田区連雀町一八」の「初音旅館」より出されたものであるという(小林 一九七六)。初谷旅館と初音旅館の関係は不明であるが、誤記の可能性も想定される。

参考文献

- 生田美智子編 二〇〇三 『資料が語るネフスキー』(大阪外国語大学)
- 石井正己 二〇〇〇 「佐々木喜善とオシラサマ」(『オシラ神の発見』遠野市立博物館)
- 石井正己 二〇一七 「ニコライ・ネフスキー遺文抄(六)」『東北地方民間伝承ノート断片』(『ビブリア』一四七)
- 岡正雄編 一九七一 『月と不死』(平凡社)
- 加藤九祚 二〇一一 『完本 天の蛇 ニコライ・ネフスキーの』

注文しつつ、使わないのであれば無理に使わせないように念押ししている。ネフスキーはあくまで自然な構図を求めていたのである。

史料番号(5)

本書簡は撮影費用の送付に関するものである。史料番号(4)では、早期の送金を伝えていたが遅くなったようで、その旨を詫びている。この段階でも五円の送金としており、金額の誤りにまだ気づいていない。

史料番号(6)

本書簡も天理図書館収蔵資料に控えが確認できる。史料番号(5)を受けて清治郎は撮影した写真を送付し、金額の不足があることを伝えたようである。ネフスキーはこれに対して不足分の一円と郵便代五十銭を送付している。内容は写真が到着したととのお礼、不足金額と郵便代の送付、遊佐のオシラサマの追加調査と写真撮影の依頼となっている。

文中に見える「遊佐」は、柳田宛大正九年(一九二〇)九月二十一日付書簡にみえる「遊佐かめよ」の事であろう。遊佐は、佐沼町松栄寺内に居住していたようで、オシラサマ二体を所有していた。

史料番号(7)

本書簡には年号の記載がない。ただし、ネフスキーが大阪外国語学校に転出したのは大正十一年(一九二二)四月のことであるから、本書簡は同年のものと推測される。本書簡によれば、

三月二十三日に小樽を立ち、東京市神田区連雀町の初谷旅館に逗留していたことが知られる。連雀町は現在の神田区須田町周辺で、ネフスキーは大正九年(一九二〇)にも連雀町周辺に宿泊したようである⁽⁴⁾。

史料番号(8)

本書簡に先立ち、清治郎は大阪方面に赴くかもしれないと伝えていたようである。内容は来阪の際には宿泊してほしいこと、但し七月末から沖縄県の宮古島を訪れる予定であることが記されている。

ネフスキーは在阪中に複数回転居し、その場所も天王寺村、枚岡南村客坊(瓢箪山)、東成区腹見町(布施近辺)と移っている。本書簡の「天王寺六一六八」は勤務先である大坂外国語学校の附近で、在阪当初は学校周辺に居住していたようである(若松二〇〇二、生田 二〇〇三)。ただし、実際に清治郎が訪れたかどうかは確認することができず、御令孫もそのような話は聞き覚えがないという。

文中でネフスキーは宮古島を旅行する予定と述べている。ネフスキーは、宮古島を三回訪れているが、本書簡にみえる大正十一年(一九二二)七月の旅行が最初である。以降、ネフスキーは宮古島の民俗・方言研究に注力していくことになる。

史料番号(9)

本書簡は、転居を伝える内容である。転居先は「枚岡南村瓢箪山八十四」とされている。若松博恵氏の研究によれば、大正

しないが、少なくとも大正九年（一九二〇）三月から大正十年（一九二一）三月にはこの住所から書簡を出している⁽³⁾。これにより本書簡から史料番号(6)までは、同住所から出されたものと推測される。

ネフスキーは登米地方を訪問した後、花巻で一泊して三十日に遠野に入っている。遠野で面会したのが伊能嘉矩と喜善である。伊能は遠野出身の人類学者で、東京帝国大学において人類学を学んだ後、台湾にわたって先住民の調査・研究を行った台湾人類学の先駆者とされる人物である。オシラサマにも早くから関心を寄せ、明治二十七年（一八九四）に「奥州地方に於て尊信せらるゝオシラ神に就きて」（『東京人類学会雑誌』第九十八号）を著して、学会にオシラサマの存在をいち早く紹介している。

前述のとおり喜善は『遠野物語』の話者、ザシキワラシ研究で知られる人物である。ネフスキーは大正六年（一九一七）にも遠野を訪れており、喜善はその際にも調査に協力し、オシラサマを譲ったりしている。また、大正九年（一九二〇）には柳田の勧めもあってネフスキーと喜善はオシラサマの共同研究を始めている（石井 二〇〇〇）。

文中にみえる『物類称呼』は、越谷吾山が安永四年（一七七五）に刊行した諸国の方言を収録した方言辞書で五巻からなる。清治郎のもとを訪れた際に贈る約束をしていたのであろう。このうち「巻之二」の動物部は欠けていた。ただし、清治郎に贈られた現物は確認できない。

本書簡でもオシラサマに関する仮説が提示されている。岩手県の山奥でオシラサマが山狩の神に関連する神とされている例を示し、日本の巫女も猟に関連するのではないかとしている。その根拠として注目したのが登米地方で調査した「弓」や「猛獣の牙、角、爪等を附けた珠数」で、これは梓弓、イラタカの数珠と呼ばれるものである。いずれもオカミサンが神降ろしする際に使用する道具で、柳田宛の大正九年（一九二〇）九月二十一日付書簡ではイラタカの数珠が複数収録され、素材や使用個数が詳細に記録されている。

また、本書簡でオシラサマ、オカミサンと使用する道具の写真撮影を依頼している。佐沼のどの写真店に依頼したのかは不明であるが、本書簡から史料番号(6)までは撮影に関する内容が中心となる。

史料番号(4)

本書簡によれば、清治郎は史料番号(3)の後に写真の構図などの確認の書簡を送ったことが推測される。内容は、撮影に関する問合せへの返答、撮影時の注意点、撮影代金の支払いである。このうち撮影代金についてはネフスキーの計算に誤りがあったことから清治郎による「六ノ誤」の注記がある。また、オカミン（オカミサン）の所にお供したと述べていることから、ネフスキーの調査には清治郎も同行していたことが判明する。

なお、本書簡からはネフスキーの写真撮影の姿勢が垣間見える。オカミサンの祈祷姿の撮影の際には道具を使っている姿を

内容は、柳田に薦められたオシラサマ研究へ助力を依頼したこと、佐沼町出身の女中からオシラサマの話を聞いたこと、問合せ内容が記されている。本書簡から史料番号(6)の内容は、オシラサマ調査に関するものである。

宛先である清治郎は、小学校教員のかたわら私財を投じて地域の古文書の書写、青島貝塚(登米市南方町)などの発掘、民俗学など郷土史研究に没頭していた(三崎 一九九七、高橋 一九九八)。民俗学の分野では、柳田が発行した『郷土研究』へ大正四(五年(一九一五)一九一六)に登米地方の事例報告を投稿し、大正四年(一九一五)にまとめた『南方村誌』には「口碑伝説」の項目を設けるなど早くから登米地方の民俗学研究に従事していた(高橋 二〇一八)。

その清治郎に調査依頼がなされた要因は、佐沼町出身の女中の存在があった。彼女は佐沼町のオシラサマをオカミサンが使用していた神と証言している。清治郎は佐沼町近隣の南方村に居住しており、『郷土研究』に佐沼町の事例を紹介している⁽¹⁾。佐沼町周辺の民俗伝承に精通した人物として白羽の矢が立ったのであろう。

次に問題となるのは、ネフスキーが清治郎の連絡先を如何に知り得たかということである。具体的な資料は確認できないが、大正九年以前から清治郎と交流を持っていた柳田・喜善等からの紹介、『郷土研究』第四卷十二号の巻末に記された「郷土研究」寄稿者及通信者芳名」が想定される(高橋 二〇一八)。これ

は、『郷土研究』が大正六年(一九一七)に一時休刊となるのに伴い、寄稿者・通信者名と住所を掲載したものである。ネフスキーはこの一覧に見えないが、『郷土研究』の読者であることが確認でき⁽²⁾、清治郎は宮城県の小欄に確認できる。

史料番号(2)

本書簡には年号の記載がないが、前後を大正九年(一九二〇)の書簡に挟まれていること、記載内容から一連の書簡と判断できる。この書簡も天理図書館所蔵資料に控えが確認できる。なお、脱字があり清治郎による「脱字あるべし」の注記がある。

内容は、返信へのお礼とオシラサマに関する仮説提示、岩手県などの旧家のオシラサマのこと、オシラサマの「アソビ」とお雛様の関係、調査報告を三月下旬までにお願したいなどである。

史料番号(3)

本書簡は、東北旅行直後に書かれた書簡である。内容は在村中のお礼と東北旅行の経過報告、『物類称呼』と北海道土産を送ること、オシラサマに関する仮説の提示と追加調査の依頼、オシラサマ・オカミサンの撮影依頼となっている。

ネフスキーは東北旅行中の八月二十八(二十九)日に登米地方を訪れ、聞き取り調査やオシラサマ・オカミサンの調査を行い清治郎宅に一泊している。文頭の在村中に対するお礼は、それらに対するものである。そして、本書簡にはネフスキーの住所が確認できる。この住所にいつ頃から居住していたかは判然と

4. 学芸員の研究ノート

史料紹介

『来翰集』所収のニコライ・ネフスキー書簡

高橋 紘

はじめに

ニコライ・ネフスキー(一八九二～一九三七)は、ロシア出身の東洋学・言語学・民俗学者である。大正四年(一九一五)、二十三歳の時にペトログラード大学派遣留学生として来日し、昭和四年(一九二九)に帰国するまで柳田國男や折口信夫等と交際しながら、民俗学やアイヌ語、宮古島方言などで優れた研究を残している(岡 一九七二、加藤 二〇一一)。

ネフスキーと登米地方の関わりは、宮城県登米郡南方村(登米市南方町)の郷土史家・高橋清治郎に、東北地方を中心として主に養蚕の神、目の神として信仰されるオシラサマの調査依頼をしたことに始まる。この調査を介して両者は親交を深め、大正九年(一九二〇)八月にはネフスキーが清治郎を訪ねて同宅に一泊し、考古遺物の閲覧や聞き取り調査、佐沼町(登米市迫町佐沼)周辺のオシラサマ・オカミサン(口寄せ巫女)の調査を行っている。

これまで両者の交流を示す資料として、天理大学付属天理図書館(以下、天理図書館)所蔵のネフスキー関係資料に清治郎宛書簡の控え三通が確認され、柳田に宛てた大正九年(一九二〇)九月二十一日付書簡の存在が知られていた(岡 一九七一、柳田 一九九九)。柳田宛書簡は、同年八月下旬から九

月上旬にかけて福島・宮城・岩手・青森県を旅行(以下、東北旅行)した成果を報告したものであり、清治郎や登米地方のオシラサマ・オカミサンをはじめとする民間伝承が紹介されている。

また、近年、石井正己氏は天理図書館に所蔵されている「東北地方民間伝承ノート断片」を紹介している。この資料は東北旅行で聞き取った民間伝承を再整理した草稿であり、柳田宛書簡にみられない聞き取り内容が含まれていた(石井 二〇一七)。

本稿で紹介するネフスキー書簡は、清治郎が自身宛の書簡を書写してまとめた『来翰集』に収録されている。本資料には、ほかに柳田や『遠野物語』の話者であり、ザシキワラシ研究等で著名な佐々木喜善の書簡が含まれており、清治郎の民俗学関連の人的交流を窺うことができる(高橋 二〇一八)。このうちネフスキー書簡は九通収められ、一部に異同はあるものの天理図書館所蔵の書簡と同一の三通を除いた六通が新出書簡となる。ただし、所収書簡の原本は現在のところ確認することは出来なない。本稿では、『来翰集』所収書簡と清治郎の御令孫宅に残されていた昭和四年(一九二九)八月の挨拶状一通も合わせて紹介したい。

高橋清治郎宛書簡の紹介と検討

史料番号(1)

本書簡は、ネフスキーからもたらされた一通目であり、天理図書館所蔵資料に控えが確認できる。この書簡のみ候文で書かれている。

青島貝塚 100 周年

登米市南方町の青島貝塚は、今からおよそ 100 年前の大正 8 年（1919）、南方村本地尋常小学校校長高橋清治郎の紹介を受けた東北帝国大学松本彦七郎博士の指揮による発掘調査が行われ、14 体の埋葬された縄文時代の人骨を得るなど大きな成果を上げました。その後も「昭和」、「平成」の各時代に調査が行われています。



発掘された縄文人骨

編集後記

平成から令和へ。またひとつ歴史が移り変わり、これからの歴史博物館としての使命を痛感している日々です。

また、年度末には新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、世界中を震撼させています。一日も早い事態の収束を願ってやみません。（宇藤）

登米市歴史博物館 博物館だより NO.25

2020 年 3 月 31 日発行

編集・発行 登米市歴史博物館

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字内町 63-20

TEL 0220-21-5411 FAX 0220-21-5412

E-mail rekishi-haku@city.tome.miyagi.jp